

——叩き続けられるドラム、静寂に響くギター之音、陰ながら支えるベースの音楽、一番目立ち響き渡るボーカルの歌——

それはひどく、鮮明に、脳裏に焼きついた光景。何気なく父親に連れて行かれたライブハウスの一角。オレンジジュースを少しずつ飲みながら、美味しい食べ物に笑顔になっている彼の笑顔を奪うのに、充分過ぎる刺激であった。

勿論——それは怖いから笑顔が消えたからでは断じてない。

凄過ぎたのだ。

あまりにも凄過ぎる、全てがクリアに見える。

「——あ」

なんて……

「カッコいいんだろう」

子供ながらにそんな言葉を、ため息を吐きながら呟いていた。

信頼出来る仲間と手を取り合う男たち。女も関係ない。男と女が手を取り合って、——乾杯。

それは冬が近い、寒い、寒い、季節の記憶。

少年が最後に視た、夢——

ぐっしやり、と音を立てて
肢体が飛んだ。

0

例えば、目の前に女の子が居て、泣いていたとする。多分その子は彼氏か何かにフラれたんだろうな。うん。男なんてーっ、と口先では言っても必じや泣いてるんだよ。

そこに、偶然通りかかった俺が居るとするよ？

黒いケースを抱えて通りかかった俺は、そこで泣いている彼女に問い掛けるんだよ。

——どうしました？

ってね。

その子はきつと思うよ、傷心した心を癒してくれ何か欲しいって。だから、俺は取りだすんだー

——このギターを。

じゃーん、と乾いた音を立てて、俺が構えるそこがステージ。俺、参上。

ギヤラリーは、本当は居なくて良い。そこに居る、泣いている女の子の為に俺は歌うだけ。……行くぜ？

マイクはなくて肉声。ギターソロで、悪いけど、ドラムもベースもボードも居ねー。それで満足か？

と言うと、その子はうん、と頷く。悪いね、本当に今日は愉快的仲間たちが居なくてさあ。

リクエストなっしんぐで、俺のオリジナル曲をキミに送ってやるよ。うん、それで元気出してくれ。

よっしゃあ、行くぜ——タイトルは——

——と、云うところで俺のファンシーな頭は現実に戻る。

まあ、実際そんな事があれば本当に凄い訳であって、そもそもそんな出来事、結局ここに来るまでにはまっただくなかった訳であった。そりゃあ、わかっているけど、少しぐらい夢を視ても良いと思っう。そんな年頃だし。

駅の前でしゃがんでいる俺。目の前にや、様々な

大人が忙しなく、動いている。SPC——

Super-Personal-Computer——をアイディスプレイしながら……。おい、人におつかるなよー。

腕時計を眺めると、約束の時間はそろそろだ。ちよつと早く来過ぎたな。朝起きた時は、お気に入りウサぴよんがねー、離したくなーいって、カワイイ事言うから二度寝したらとんでもない時間でそれはそれはね。遅刻するかと思って走ってきたけど、ファンシーな頭が考えたような展開にもならなかつたし、時間には意外にも早く着いちゃったって言うオマケつき。

ため息を吐きながら待ち続けるしかない。だって一人じゃぜつてー迷う。産まれてからこの方住み慣れた場所から離れた事殆どないけど、全部を把握するなんて不可能。

誰だよ！ 長野を第二東京都にしたの！ おかげで新潟まで吸い込んで、結構凄い巨大になっちゃったじゃねーかつ！

えーっ、と。いつだっけか？ 新潟県の半分以上を、長野もとい第二東京が吸い込んだの？ 二〇一〇年だっけ？

頭をぐるぐる回しても脳みそは答えを出してくれない。そこまで俺の頭は良く出来ちゃいねー。無理だー。よく高校に入学出来たなー。

今さらになって自分がどうして高校に入学出来たのかを問うてみる。いやいや、実力っしょ？ と言っっていたあの時が懐かしい。あれから何年経ったでしょうか？ あら不思議。実際は一カ月も経っちゃいない。

あーあ、どうして俺ここに居るのかわかんなくなっちゃまったよ。

ごろんと、駅の端っこのベンチに横になると、周りの人間の視線は集中する。当たり前の事だけど、暇で仕方がないから仕方がない。PSP、宅配便の箱の中に入れて自分で携帯してくれば良かった。そうだよ、何の為の携帯ゲームだよ。携帯ってつく

意味ねーじゃん！

——それよか本当に、いつだったかな、長野が新潟を吸い込んだの？ 気になって寝れねー……

「二〇一二年六月二日だよ、アリス……」

視線だけ動かして足元を視ると、文庫本を片手に立っているヤツを視かける。お、居たのか。

「さっきから」

「どの辺から？」

「ファンシーな妄想の部分から」

「最初からじゃねーかつ！ 居たんなら声かけろよ、びっくりするだろ！」

上半身を起こして何食わぬ顔をして文庫本を読んでいるヤツの頭を小突く。

「……痛い」

黙ってた罰だ。

つか、お前、歴史の話は本当なのか？

「ああ。二〇一二年六月二日。長野県の経済悪化による為、近隣県——すなわち新潟県、福島県、埼玉県によって多く合併していく中で、長野県を第二東京都にする案が浮上。その年の六月二日に、反転、取り込んだ市を全て長野兼東京として吸収した。

元々、温暖化で東京が沈みつつあったからな。国のお偉いさんにとっては丁度よかった。総理官邸も、大統領官邸に替える機会でもあった。その時なら、アメリカからの支援もあったしな。

……中学一年生、小学五年生の現代社会での話だし。しかも、高校の入試にも出た」

「えマジで？」

じゃあそれ俺落としてるわ。絶対に。

「自己採点した時合ってたってはいやいでたのはアリス」

「マジかよ……おーこわ、早くもアルツハイマ

ーかよ、老人かよ、ボケ扱いかよ」

「そこまで言っていない」

冗談だつーの……真に受けんなよ、ブランシュ。ん、と頷きを返して俺の隣に座り文庫本を黙々と

読み続ける。雪白ブランシュ——カチューシャで上げた前髪なんだけど、それでも落ちてくるからワックスをつけて無理矢理あげている。口数が少なく、感情表現が下手クソ。普通だったらぜってーにお近づきになりたくないタイプなんだけどな、俺は少々奇怪でね、多分どこか壊れているんだと思う。こうしてブランシュとは友達で、随分と長い事一緒に居る仲だ。

……あと一人か。時間、大丈夫だよな？

「まだ余裕ある」

腕時計を眺めると確かに、まだ時間はそこまで経っていない。そもそも、駅に集合するの七時だったよな。まだ五十分にもなつてねーし。あと少しだなんて思ってたのが四十分ちよいの話だったから、八分ぐらいい経ってるのか。

入学式受付開始が七時からで、開始時刻が九時って言うってたな。ちよい早く着けば良いから、時間に余裕を持って七時に集まって、学校に着けば一時間ぐらい余裕があった方が良くって——そう思ってた場所にしたんだけど。こつからあの学校までどれぐらい掛かるんだろうな。

立ち上がって、背伸びをすると、青い空が広がっている。今日は良い天気だな。入学式日和っちゃあ日和だけだね。視線を移し桜の木も向こう側に見える。今年はまだもう散ってるし、葉桜だな。ああ、そういう今年は暖かかった。

首を回して、肩を回すと、ベンチに腰を戻す。すると、ぽん、とブランシュの頭を叩く手が視えた。

「よ。早いな」

俺から視て左側の目に眼帯をつけて、長い後ろの髪を一つにまとめたヤツがバッグを片手に立っていた。

「レイー、おそいよー、遅刻だよー」

「何言ってるんだよ。お前らが早過ぎるんだよ」

ブランシュを挟み込む形でレイーもベンチに腰を掛ける。茨姫レイー——どうみたってチンピラだ。以

上。正直チンピラ。うん、チンピラ。でもまあ俺にとっちゃ友達だしね、ブランシユと一緒に、ガキの頃から一緒に居る仲。

「ブランシユ、今日ちよつとワックスつけ過ぎじゃね？」

髪を触ったレイは気がついたように手を眺めて問い掛ける。そうそう、俺も言ったんだけどさ、何でも今日は随分とツンデレだったようで。

「あー……もつと固めのワックス買えよな、もう」

「俺もそう言っただけだよ」

「固いの……ヤダ」

「——と、譲らないのですよレイ先生」

はあ、とため息を吐くレイ。正直無理知慮する必要はないと思うんだけど、ブランシユの髪質考えるともうちよつとカタイのでも良いと思うけどね。しつかりと、カタくして後ろに下げないと。随分前に柔らかい自然質のワックス買ったんだけど、カチューシヤで後ろに下げても戻ってくる云う偉業を成し遂げたモノでして。今使ってるのだから、結構カタイんだぜ？ ガチガチだよ。

「女専用のなんだ……一日中髪型キープスプレーみたいなのでも良いんじゃないかね？」

それ、今度試してみるか。今日の午後からイトヨ行ってみるか？

良い、つと返してくるブランシユくん。どうしようねー、まあ本人良いなら良いんじゃないかね？

カラカラ、と笑いながら俺はレイの肩を叩くと、うっとおしいわ、と言っただけ。釣れないね。

釣れるレイも全然面白くないから良いけど。

——ま、いつか、早いけどそろつと行きますか。いつまでもこんな駅に居たって、どこに行くワケでもあるまいし。



俺、ブランシユ、レイが『長野第二東京都 学校

法人 都立東線高等学校芸術学部』の入学を決めたのは去年の丁度今頃の話だった。

仕事の都合で海外に行ったり、来たりの生活を送っている両親が、そろつと進路について真剣に考えろ、と嫌なセリフを受話器越しに言った為に、マジで真剣に考えていた時の話だ。

……ガキの頃から、俺は何か、音楽の職業に就きたかった。けど俺の頭じゃマジもんの学校は無理であつて、仕方なく、偏差値的にもそこそこ——担任の教師にはギリギリだな、とか言われたけど——この東線高校の芸術学部に入る事に頭の中で決めていた。

東線高校の芸術学部は二年からコース指定があるとかで、それぞれ芸能コース、音楽コース、芸術コース、んでもって、今年から新しく設立されたのがデザインコース。芸術学部はそれぞれ専門的なコースを四つ保持していて、二年生から分岐する。三年間、専門授業を行う。

つーわけで、この学校は高校だけど四年間も過さなきゃいけないワケで、考えようによっては就職する時期が一年遅れるワケで。大学に入学するには、二年生からの編入も可。パンフレットに書いてあつた。

ギリギリの偏差値で、頑張つて一年間勉強した結果、何とか合格の通知を一月には貰った。

ちなみに、ブランシユとレイも同じ日に同じクラスで受験した。

ブランシユも音楽コースで。レイはこの学校のもう一つの学部であるスポーツ学部を受験したけど駄目だったらしくて、三月に二次試験を受けて芸術学部に入學。コースは……一年の内に決めるとよ。

うーん、本当に良かったと。一月の内に受験が終わった俺とブランシユは徐々に適度な春休みを送っていたんだけどね、レイは受験勉強中で、それを妨害するのが楽しくて……。レイの横でわざとギター弾いてみたり、歌ってみたりと色々やって

たら減茶苦茶怒られたのも良い思い出。

三月全てが終わった後にはもう春休みの終盤戦で、レイと遊んだのも終盤戦の二週間程度。空いていた二ヶ月間で遊び尽くした俺たちにとってはまあつまらなかったね。それに対しても相当怒られた。友情ブレイクするところだったぜ……

四月二日——東線高校の芸術学部の入学式はその日だ。



「ちなみにここから東線高校までどれくらいだ？」

歩いている途中で、視た事のない景色を眺めながらレイに問い掛けてみる。

「ざっと、歩いて三十分ぐらいだな」

——えーと、俺、駅に行くのに家から三十分掛かったんデスヨ？ それに加えて三十分って、合計一時間——うわっ、最悪。今日入学式だから九時まで集合だけど、授業始まったら、どうなる？

「高校は、基本八時半まで登校。………例外としても、八時とか、その辺だった………」

ブランシュの豆知識に感心しつつ、それだと俺って、七時前には実家出ないといけないんじゃないの、とか思っちゃう。事実ですよね？

「なるな。——ご臨終だな」

「真顔で言うなよお！ 俺朝弱い知ってるだろーっ！」

「オレだって弱いっての！ お前以上に弱いわ！

そもそも、お前ん家医者だろ！ 起きるの得意じゃねーのかよ！？」

「起きられるか！ 俺のウサちゃん起きないでー、まだ夢の中に居ようよー、とか言うから無理無理っ！」

「おま……っ！ 女ガキじゃあるまいし早めにぬいぐるみ辞めろ！」

「なにおう！ ウサぴよんなめんなっ！ カワイイ

よなあ、ブランシュ！ ほら！」

バッグの中には常に忍ばせて……

「おまああああええええええ！ アホかあああああ！ 学校にぬいぐるみ持ってくる阿呆がどこに居るかあ！」

「ここ」

「死ね！」

あーだこーだ言うなよ、俺だって少しは反省しているんだ。何せ、学校なんて云う死地に、ウサぴよんを連れていかなきゃだなんて、本当に酷な事をしたと思っているよ、今は。

「ちげーだろっ！ そちげーだろっ！ 論じる部分とか反省する部分違うだろ！ 世間体を考えろ世間体を！」

そんな世間体世間体って……そんな事ばっかり言うからレイは駄目なんだよ。ねーウサぴよん。

「良いから貸せ！ もう没収だお前！」

「あーっ！ 俺からウサぴよんを取るなア！ 何が残るってんだよーっ！」

「知るか！」

ぐいぐいとしている俺らを余所に、ブランシュは立ち止った事を良いのに、文庫本を制服の懐から取り出して読んでいる。周りの視線も買っているけど、でも今はウサぴよんを取り戻すのが先決だ。取り戻したら歩く、うん、それまで待っててくれ。

てかやつぱりレイって力持ちだよなあ！ 俺じゃ無理なんだけど………おっ！ 引っ張る力に体重を乗せる。レイは多分全精力入れてねーと思っただけ……ッ！

しばらくマジでその場でぬいぐるみを引っ張り合っていた俺たちが止まったのは、本当に、突然の事であった。

ぴりり、と音を立てて、ウサぴよんの中身が飛び散って——俺とレイはその場の地面に尻もちをついた。

………ああ、ウサぴよんが………。そんな、

そんな……本当にごめんよ、俺がこんなところに連れてきたばかりに、凶暴猛獣の檻の中に入れてたばかりに——ちゃんとレイの首に首輪つけておかなかつたばかりにいいいいいいいい！

犬か、とか呟きながらレイは立ち上がって、体中についた砂を掃うと、立ち上がらせる。

なんだよお、やだよお、不良が襲ってくるう、チンピラが襲ってくるう。捕まったら最後だあ、殺されるう。ウサぴよんと同じ運命辿っちゃうよお……出てくるのは白い綿じゃなくて赤い血だけだね。

「グロい事言うな。ほら行くぞ。もうどうしようもねーだろうが。——あーっもうわかったよ！ 焔りにサーティーワンのアイスクリームおごつてやるから！」

「え、マジ？」

「……転換早いなおい」

「トリプルでお願いします」

「まるで女子高生だ」

最後のブランシュのツッコミはスルーする事しよう。何だよ、最初からそう言ってくれば良いんだよ。……すまん、ウサぴよん……人間、食欲には勝てんのだよ。ちゃんとお母さん帰ってきたら直してもらうからな。既につきはぎだらけのウサぴよんをバッグの中に入れて、歩き出す。

——で、どれくらいかな、学校に着くの。つかどの辺なのよ。俺この長野県で産まれて育ったけど正直場所なんざ知らん。広いからね。

「地理的には、旧新潟の境目に近い場所に存在している」

その地理的にもわからないんだけどなあ——と、言う前に、予想していたのか目の前に文庫本を渡してくる。ん、なんじゃこりゃ。

文庫本の挿絵の中に、日本地図の丁度この辺りの地図が描かれていた。しかも旧日本地図で、千葉もちゃんとあるし、東京都も一つしかない地図。裏を返して文庫カバーを見ると、新訳ダブルクロス物語、

とか書かれている。ストーリーは割愛するとして、丁度地図の挿絵が描かれているんだよな。

はあ、この辺ね——って細かいところわかんねーしつ。小説の挿絵にそこまで求めちゃおしまいなんだろーけど。

とりあえず、住んでいる場所がこの辺だったと思うから……そんなに遠くないのか。そうだよな、駅から三十分の場所なんてそんなに長い道のりはないよな。時間が気になるならバスに乗れば良いし。学校まで出ているよなあ、さつきチェックしてくれば良かった。あとの祭りだけだ。

言った通り、三十分ジャストに学校が視えた。

最初の感想は……うお、でけー。さすがは有名高校だな。芸能人とかが通ったりするらしいこの学校の生徒になるんだから、有名人とかと会っちゃったりして！ 今日が入学式だから先輩方々は居ないから、一年生で有名人とか居ないのかな！

「しかしデカイな」

辺りを見渡しながらレイはそんな当たり前の、視たまの感想を述べる。それぐらいわかってるの。「迷子になりそうだ」

文庫本を閉じたブランシュも視たままの感想を同じく述べる。

おいおい、お前たちそんな感想しか出てこないのかよ。もつと、こう、有名人に会えるかもしれない！ とか、そんな感想はないのかよ、おい。

「ないな」

「ない」

即答——つ。俺ガツカリ。絶対に共感してくれと戻ったのにい。

……答えが返ってこないのはわかっていただけだね。いや、確かにこれ広い。すっげー広い。ぜってー迷子になると思う。

無言で取り出した学校案内のパンフレットを三人で覗くと、ここはどうやら正面玄関のちよつと手前

らしい。ここを真直ぐ行くと中に入れるのか。

正門のところには見張りのガードマンが何人も居て、嚴重。有名人に何かあると拙いもんな。俺たちは制服着てたから通してくれたようなものか。

庭もひれーなあ。だがしかし驚くほど人が居ないのが現実。だから今日は入学式だから人が居ないの。——誰に言ってるんだ、俺。

正面玄関に入ると、そこには女の子が三人受付についており、笑顔で受付をしていた。長蛇の列にはなっていないな、まだ一時間ぐらい時間あるしな。三十分ぐらい前になるとすごい事になるんだろうな。

「新入生の方ですね？」

笑顔で言われる。

「はい」

「では、順番に名前を——」

「夢崎アリスです」

「茨姫レイです」

「白雪ブランシュ」

述べるると手前にある名簿の中から探す作業に入るんだけど……ん、随分時間かかるね。あくびが出る。

「おいアリス」

「あ、ごめんなさい！」

「いえ！ ちょっとピンチヒッターなんで慣れてなくて……あっ！」

そこで、突然立ち上がって何事かと思った！ になに、有名人！？

後ろを振り向くとそこには——

「あ、赤城くーんっ！」

「なんだよ、大声出して」

——んな！ ば……ば、ば……すげえ長いバットを肩に構えたヤツが居たア！

「何こいつ？ え！ マジで！？」

「ごめんなさい、わからなくて……」

「おいおい。学部訊いたか？」

「あ——」

赤城と呼ばれた先輩——らしき人——はため息を一つ吐いてギロリと睨みつけるような視線でこちらを向く。ひえーっ、こえええええええええ。思わずレイの後ろに隠れるぜ！ ブランシュかもーんっ！ 怖い目つき同士、レイ頼んだ。

「芸術学部ですけど……」

さすがレイ！ 怖い顔ランキング校内ナンバーワン（中学、俺&ブランシュ調べ）！ 同時にイケメンランキングナンバーワン（中学、俺&ブランシュ調べ）！

しっかし、このおつかない人もそれなりにイケメンだよなあ、硬派な感じだ。整ってるけど、真日本人な顔だな。このご時世には珍しい。

——そもそも、特区になってからと云うものの、日本以外の人間が多く移住するようになって、国際結婚も増えたからな。名前もカタカナ表記の人ばかりで——かく言う俺とか、ブランシュ、当然レイも真日本人なんかじゃない。何割か、外国の血も混じってる。今時真日本人なんて日本でも珍しいよ。

ほらよ、と言われてレイから資料を受け取る。さっきゆ。クラス分けとかどうするんだろうな。この資料には書いてないみたいだけど……授業が始まる前に言われるんだろうな。

いよっし、準備完了。待合室に指定されてる教室に向かいますか。

受付の場所に背中を向けて歩き出す——やっばり、迷う人間多いんだな、壁に矢印と、体育館とか書かれた紙が貼られている。途中で矢印の紙に待合室と同時に書かれているからそっちに向かう。

二階の真中の教室の扉に待合室とデカデカと書かれている。失礼しまーす……って、誰も居ねー……けどバッグがあるって事は誰かここに居たんだろうな。トイレかな？

適当なところにバッグを置いて俺たちも腰を掛ける事にする。それより、これから一時間何をしているか、と云う事が問題になってくるんだけど。

考えている内にブランシユは文庫本——ああ、さっきの新訳なんちゃたかたらダブルクロスだったかサザンクロス——を取り出して黙々と読んでいる。そろりとバッグを覗くと数十冊の本がギッシリと………ん、新訳ダブルクロス物語Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ——何巻あるんだろ、これ。

「五十巻」

「なっげえー」

「続刊中……」

「まだ続いてんの!?!」

コクリと頷くブランシユくん。おいおい、長過ぎれば良いってものじゃないと思っただけだよ、その小説何年続いてんだよ。

「十六年」

「アホだろ、その作者」

「マンネリ化してる。でも、一度読み始めたし、最後まで読んでみる」

「ご苦労な事で……、俺だったらそのお金でギターの絃とか、雑誌に使いそうだよ。PS5も欲しいし。それよか、俺と同じで暇のはずのレイくんは一体何をしていますかこのヤロー。熱心に資料なんか読んでるんですかこのヤロー。熱心に資料なんか読んだんですか許しませんよお母さん。」

「誰がお母さんか!」

「いやまあ、なんとなく。で、マジな話何見てんのさ。」

「部活表。部活どうすつかないって……」

「帰宅部でいーんじゃね?」

「まあそれでも良いんだけどよ、何かやりたいな、って思ってる」

あ、そっか、レイはスポーツ学部に入る予定だったんだからな。スポーツ学部は確か部活強制だった記憶があるんだけど、芸術学部は強制じゃねーの? 答えたのは視線を本から離さないブランシユだった。なんか、もうブランシユって説明役だな。

「そうさせてるのはアリスだろ……」

芸術学部は芸能人が多いから、帰宅部が認められている。だから一般生徒も、芸術学部にいる人間なら部活をする義務はないと入学前のパンフレットに書いてあった」

「そうだったか? 記憶にないな。つかお前の記憶力が良過ぎんだよう、このこの。」

「痛い」

「あ、わりわりい」

手を離して、レイの隣に中腰になって、テーブルの上の資料を眺める。一応、芸術学部の間でもスポーツ系の部活に入れるんだな。当然ながら。

ふーん、案外いっぱいあるんだな。芸術系の部活表って、何ページ? 自分のバッグの中の資料を取り出してパラパラめくって行って、芸術系部活のページに指を挟む。

えーと——文芸部に、ファッションデザイン部——へえ、そんなもんならあるんだ。吹奏楽部に合唱部………

そこで、俺の手が止まって、資料を閉じる。そこにあつたのは——バンド部。

目を見開いたまま、ゆっくりと後ろの席について、背もたれに背中を掛ける。突然の行動にブランシユとレイは互いに顔を見合わせている。

「どした?」

「何か良い部活でも、あつたのか?」

「いや——ちよつと——」

芸術学部のページをめくろうとしているレイ。本を開いて、一緒に何を覗いていたかを探そうとしているブランシユ。……いや、どうせわかっちゃう事だから——ちよつと、俺自身の中で抵抗があるのかな。

遙か昔に俺が思った理想があるとしたら多分そこなんだけど………今じゃ駄目か? なあ、父さん、俺、出来ると思っかねえ。

そもそも、ギターやってる身だし、自身がないなんて言わせられないワケで。そもそもごちゃごちゃ

悩むのは俺の趣味じゃない。

ポツリと――

「なあ二人ともおー」

「ん？」

「どうした、アリス」

「――俺、バンドしたいな……」

『は？』

二人の声がハモった。